

主筆 江原萬里

聖書の眞理

第五十四號

四月號

擾亂の世と平和の國 眞の教會は

何處に在るか 人間の微小と偉大

聖書は神の御言(下) 江原萬里

逐語神言説と高等批評

エレミヤ記の研究 江原萬里

申命記の發見と宗教改革(下)

受難週間の研究 小栗襄三

エルサレムにて遂げんとする

彼の死

柏木通信 齋藤宗次郎

祖父の書翰 江原萬里

走馬燈 シヤクルトンの經驗

身邊漫筆

走馬燈

嘗て國會開設の請願運動が我が國に起つた時、若し西洋諸國のやうに憲法が布かれ、凡て法律は人民の選出した代議士を以て構成する議會の協賛に由つて制定せられたにせば、我が國は一躍西洋諸國に劣らない文明國になるであらうと人々々は思つたのである。

憲法は發布せられ、議會は開設せられた。而して最初の代議士選舉は嚴肅に行はれ、各地方皆其の地方の最も名望あり、才識ある者を選んで議會に遣つた。されば議會は皆一流の人物を網羅し、彼等は悉く國士であつた。第二第三回の選舉も殆ど之と同様であつた。然し乍らそれ以來代議士の品位は次第に低下し、國民の議會に對する信頼も亦年と共に薄らいた。官僚は代議士よりも遙かに其の質が優秀であつて、國政の能率が上つたため、官僚政治を謳歌する聲は四方より上つた。

やがて官僚政治も亦人々に飽かれて來た。こゝに於て「憲政の神様」が出現して、日本の政治が幼稚なのは官僚政治のためである。政黨政治が一日早く實行されたならば、一日早く理想の國になると唱へ、全國の言論機關は異口同音之に和した。原内閣以來我が國は事實上政黨政治となつた。そして政治は之に由つて少しも改善せられない事を知つた。

爰に於てか政治屋は、それは我が國の選舉法が制限選舉主義であるためである。若し財産上の制限を撤廢し、所謂普通選舉制度に改める時は政治は改善され、一舉に政黨の腐敗は止むと唱へ出した。「おれに選舉權なぞくれぬ」と全國民はアカンシヨ節にまで歌ひ出し

た。遂に普通選舉法は制定された。そして買収は益々盛んとなり、政黨の腐敗は益々深刻となつて來た。

今や我が國にては、憲法政治の模範である英國に模倣して二大政黨が順次代つて政權を握る事の原則が確立した。我が國に憲法發布せられてより數十年憲法政治の發達のため苦節を守り來た、往年の「憲政の神様」が朝に立つた。而して其の率ゆる政黨は我が國議會あつて以來未曾有の大多數を占めた。我が國の政黨政治の盛大はその絶頂に達した。然かもその一步先は那落の斷崖である。

國民は既に政黨政治に飽いた。彼等は獨裁政治を望み、時勢は憲法發布以前に轉回し始めた。板垣も死し、自由も死した。今まで國民は砂漠を旅して、照りつける陽光を遮け渴を醫す、綠林清泉の蛋氣樓を望んで、往けども往けども失望と疲勞との外に何物も得ない一隊の商人のやうに道を迷ひ、只動いてゐる事に僅かに慰めを得てゐただけであつた。此の世の論者の唱ふところはいずれもかくの如し。彼等の意見は最も實狀に適切で最も實際的效果ありと自負するも事實然らざるを如何にせん。

此の先國民は何處に往く。私は英國近刊の時事評論誌上にユーゴースラフの獨裁政治の實情を讀んで戰慄した。凡ての自由は剝奪され、暗殺に次ぐ暗殺を以てする。これが千九百二十九年以來の彼の國の獨裁政治である。そも我が國人はこれを望むのか。

人のする改革は皆失敗である。先づ神の國と神の義とを求めよ、さらばこれらの事はつけ加へらるべし(馬太傳六・三三)。眞の改革は靈魂の回心より來る。急がば廻れである。迂の如く見えて此程早い者はない。

聖書之眞理

第五十四號

昭和七年四月一日發行

擾亂の世と平和の國

主 筆

我等の眼前に擾亂の世が存在する。爆彈、砲撃、争闘、暗殺、掠奪の世である。我等の心中に平和の國がある。歡喜、希望、感謝、愛の國である。朗らかである。清澄である。溫和である。

人は眼前の世を己が國と思ひ、此の世以外に此の美はしき御國の有ることを知らない。故に此の世を住み良き國に爲さんと努力し、却つて濁流に呑まるゝ所となる。各自の心の中にキリストを迎へ奉ることに由つて、新天新地が出現する事を知らない。

我等が仰望する黄金社會は眼前に在る此の擾亂の世が漸次進化して達成されるのではない、我等の心中に既に築かれたるキリストの御國が、やがて此の世に取つて代るのである。進化ではない。改良ではない。革命である。然かもそれは外よりする破壊に由らず、内よりする顯現である。世が益々擾亂を増し來ることは、その顯現の間近かなる預告である。されば我等は世の擾亂に由つて失望しない。益々キリストの御國の到來近しとする。世暗くして光明は益々光輝を放つ。天上にきらめく無數の星斗は、暗夜となつて始めて明に看取し得る。その如く心にキリストを宿し奉れる者は暗き生涯、悲痛憂愁の境遇に在つて益々輝く。

我等は此の世の者ではない。我等の國は天に在る。我等は此の世のために生きない。天に在る我が國、即ち心の中に宿せるキリストの御國のため生きる、それは生くる價值がある。それ故にそ

のためには死する價值がある。何となれば、凡そ死するに價しない程のものならば、そのために生くるにも價しないから。されば我等は皆此の御國のために死する覺悟をしやうではないか。

眞の教會は

何處に在るか

ゴットフリード・アーノルドは云ふ。「ごの時代でも、眞の教會は現實の教會から放逐された其の當座の其の者と共に在る」と。眞の教會はロマ教會から破門された當時のルーテルと共に在つた。必らずしも後のルーテル教會にない。眞の教會は教會から放逐された當時の内村先生と共に在つた。先生死後の無教會主義にない。我等若し彼等より公的提携を中止されたならば、眞の教會は多分その時の我等と共に在るであらう。

人間の微小と偉大

バスカルの有名な語に「人は一本の葦に過ぎない。だが物を考へる葦である」と云ふのがある。我等は少しく天文を學んで、如何に宇宙が悠久浩大無邊であるかを知り、又朝に生れ夕に死する人間の微小を知る。まことに人は一本の葦である。

だが、物を考へる葦である。我等は我等の微小を知り、宇宙の浩大無邊を知る。廣き宇宙何處に我等の如く己を知る者あるか。實に宇宙は我等の出現に由つて意識者となつたのである。我等は外なる世界に踏み蹂られ、壓し潰されても、我等はそれを意識する。否、己は十字架に釘けられ乍ら、「父よ、彼等を赦し給へ、その爲す所を知らざればなり」との偉大なる祈は、此の微小なる人の口より發せられた。浩大なる宇宙を創造し給へる神は、此の微小なる人の靈となり給ふた。

聖書は神の御言(下)

逐語神言説と高等批評

江原 萬里

六 兩陣營よりの攻撃

此の聖書逐語神言無謬説と、それから出る多くの不合理とは、遂に二方面から激しく攻撃されるに至つた。その第一はゼスイット派からの攻撃であつて、彼らはロマ教會の無謬を主張するために、聖書の方を必ずしも無謬ではないと主張した。その第二はカルピン派に反對したソシニアン派、アルミニアン派からの攻撃であつて、彼らは合理主義の立場から、聖書を自由に批評し、その言の悉くが無謬でない事を主張した。

ホツプスはモーセの五書が必ずしも悉くモーセの筆になつたものでない事を論じ、若しモーセが

悉く之を書いたとせば、申命記第三十四章六節以下に「斯の如くエホバの僕モーセはエホバの言のごとくモアブの地に死ねり、エホバ……これを葬り給へり。今日に至るまでその墓を知る人なし」とある「今日に至るまで」は全く無意味となると論じた。モーセが墓の中で申命記を書かない限り、少なくとも此の一節はモーセの書でない事は明である。その他之に類するものが聖書中に多い。近代に至り聖書と教會とを冷罵して、人心に多大の衝動を與へた者にして、恐らくはボルテヤとトマス・ペーンの二人の如きはあるまい。ボルテヤについては、私は嘗て「思想と生活誌」に之を書いた。(聖書の現代經濟觀第五頁)。

トム・ペーンの著「道德の時代」は、當時佛國のカトリック教會が頑迷、固陋、不誠實、虚偽、甚しく政治上の自由を妨げたのを憤慨して書いたものであるが、聖書も彼の側杖を食つた。彼は舊

約聖書を順次批評し來り、「ルツ記になると、之は馬鹿氣切つた話をダラ／＼と不手際に語られたもので、誰れの作だかわからないが、田舎のルムベシ娘が愚にもその從兄ボアズのベッドにもぐり込んだと云ふのだ。之が神の御言だそうだ。然し此のルツ記は聖書中上乘の一つだ。それは人殺しと掠奪とが書かれてないから」と。彼は新約聖書に來り、十字架上の贖罪の教義を嘲けて、「こんな陰慘な問題は……神の創造になる外氣を呼吸する者には向かない」と云つた。

かやうに聖書は極端教會主義者及び極端合理主義者の兩陣營から攻撃され、之に對して聖書の全部神言無謬説を固守する者は、勢ひ牽強附會を事とせざるを得なかつた。聖書の絶對無謬、全部神言説の破綻は遂に來た。それは一方には自然科學の進歩に由り、他方には所謂高等批評の發達に由つた。

七 自然科學の發達

自然科學の發達が最初に聖書無謬説に大打撃を與へたのは、コペルニカスの地動説であつた。ガリレオも亦地動説を説へて教會から其の説の撤回を命ぜられ、だつて動くものは動くんだから仕方がない」と呟いた。教會は權力を以て教會の教義を支持したが、然し動くものは動くから仕方がない。之に由つてロマ教會の天動説は崩れた。太陽や星が地球の周圍を圍繞するのでなくて、地球が太陽の周圍を回轉するのであるとの説は、明白に教會が教へ來た前述の宇宙觀、人世觀を破るに充分であつた。然し乍ら注意すべき事はこの時崩れたものは教會の自然科學であつて、聖書その物ではなかつた事である。

聖書無謬説に打撃を與へた自然科學發達の第二は、地質學の結論であつた。創世記に神は六日に天地を創造し給ふたとある。然るに地殼の生成

は決してかゝる短日月で出来るものでない事は明かとなつた。聖書は自然科学に關しては、文字通りに解すべからざる事は之ではつきりした。

第三はダーウキンの進化論であつた。凡ての生物は漸次進化の道程を経て、今日の状態に達したものであつて、神が始めから各種別毎に之を創造し給ふたのではないと云ふのである。人間は猿のやうなものから進化したのであり、昔はアミバの一種であつたと知らされて、聖書の權威は、いたく傷けられた。今日に至つて此の聖書と進化論とは大體の調和を得たが、未だその衝突は止んだのではない。

八 聖書の高等批評

かやうに自然科学の發達が聖書無謬説に大なる打撃を與へたと同時に、聖書の文書その物の研究が、聖書は全部神が人の手を執り、宛かも之を筆の如くにして書き給ふたものであるとの傳來の信

念を其の儘に受け入れる事を困難にした。舊約では前掲英のホツブス、佛のアストルスに始まり、獨逸のアイヒホルンに由つて確實なる基礎を据えられ、エバルト、ファトケ、ロキス、キューネン、ヴェルハウゼンによつて大成され、新約に於てはバウルに由つて聖書學者を著しく刺激した、高等批評がそれである。

聖書の高等批評とは、本文の基礎的批評に相對してその上層批評の謂である。即ち現在存在する數百種の寫本中、何れが原文の文字と同じものであるか、聖書の本文の正否を批判するのが基礎的批評である。そして本文が確定した上で、上層の批判が始まるのである。之が高等批評である。

之れは二つに分れる。第一は文書的批判であつて、聖書の各編を一つの文書と見、その書かれた時代は何時か、著者は何人か、その當時代の状態は如何、之についてその書は何を云はんとして書

かれたか。原書は如何なる變遷をして現在の状態になつたか、之である。此の批判の後に歴史的批判が来る。即ちそこに書かれた事柄は歴史上の事實として、どの位信憑出来るか否か、之を他の文書に照らしてその價值を定める事之である。之に由つて、舊約聖書に就て云へば、イスラエルの歴史を確定し、その變遷の順序、その宗教の特異性を發見することを任務とするものである。此の文書批判が近代に至り、著しく發達し、その結果聖書無謬、逐語神言説は全く破れた。

九 逐語神言説の破綻

若し聖書の文字は悉く神が人を筆として書さ給ふたものであるならば、舊約聖書中イスラエルの歴史に齟齬がある筈はない。然るに何故イスラエルの歴史を叙するに、サムエル書及び列王記略と歴代史略との間に事實の相違があるか。又聖書の文體が之を書いた各人の個性によつて千差萬別で

あり、アモスとエレミヤとその色彩が異なるのはどう云ふ譯か。更に又モーセ一人を以て神が五書を書かじめ給ふたとせば、何故その中に學者がJ、E、D、Pと名づける四つの明白なる系統が存在するか。此等は到底不可解である。

他方印度の聖典ベダ、ムハメット教のコーランも亦全部神言なりと信ぜられてゐる。殊にベダに至つては此の世の前、永遠の彼岸より既に此の書は書かれてあつたと信じられてゐるのである。されば神言説は獨り聖書のみではない、然るに奇體なる事には、聖書自身は決して全部神が自ら之を語り給ふたと主張してゐない事である。ルカ傳は其の序文に於て「我も亦最初より詳細に推し尋ねて」研究の結果、此の傳を書いたと斷つてゐる。又コリント後書第十一章第十七節以下に「今いふ所は主によりて云ふにあらず、愚なる者として大膽に誇りて云ふなり云々」とあるは、決して

神がパウロを筆として神自ら語り給へる御言でない事は明である。これ明かに人間パウロが己れ自らを語つてゐるのである。

又若し聖書の文字は一言一句悉く神の御言なりとせば、新約聖書に引用せられた二百七十五の舊約聖書の文字及び其の内容の多くに變更を加へられてゐるのは何故か。更に又假令原文聖書はかゝる誤りなく、全部完全なる神の御言であり、只寫本の際書き誤つたのであると窮餘の逃口上を云ふならば、今や原文は全く世に存しない、現在ある最も古いものもそれから數百年を経たる寫本に過ぎない。何を以て原文は然らずと云ひ得るか。

かやうの理由よりして聖書の文字その儘が一言一句神の直接の御言であると云ふ事は、今となつては到底信する事は不可能となつたのである。之は誤り易い人間が、神の御靈によつてインスパイヤされて書いたものと云ふ外はない。

十 兩 極 端

自然科学の發達と聖書の高等批評の發達とは、舊來の聖書觀を殆んど粉碎した。然し乍ら今日と雖も勿論舊き聖書觀を奉ずる者は少なくない。米國に於ける「根本主義者」中の極端なる者はそれである。彼らの一人なる前國務卿ブライアンは、先年ある教師が教室でダーウキンの進化論を講じた事を非難し、その教師を排斥して世界の眼を見はらしめた。嘗てアウグスチンとペラギアス、又カルビンとソシヌスが互に救は自由意志に由るか、神の絶對的恩恵に由るかを争つたやうに、現代基督教の二大對立は、基督教を以て個人の救が主か、社會の救が主かとの對立と、此の高等批評を基礎とする近代主義と、舊説をなるべく純眞に維持しやうとする根本主義との對立がそれである。

ホーマーの詩に、オデッセーが己が愛する國に歸航の途中、右手に何物をも受容れず、之に觸れ

るが最後、船は粉碎されて跡方もなくなると云ふスキラの巨岩が海中に屹立し、左手には阿波の鳴門よりも大きな恐ろしい大渦巻があり、船が之に近よる時には悉く之に吸込まれ、何物をも鵜呑にするカリブデスの淵があつた。此の二つの間の狭い路をいづれにも觸れず、眞直ぐに通過しなければ、彼は愛する者の待つ美はしき家庭、人類の理想郷に達する事は出来なかつた。我等も亦神の御國に到るために、何物をも鵜呑にする聖書逐語神言説と、極端にして何物をも信じないやうな高等批評との間を無事に通過しなければならぬ。

然し乍ら我國に於て禪宗と眞宗とは相對立し乍ら、道元と親鸞との間に深い一致があるやうに、又カルビン主義とメソヂスト主義と相反對し乍ら、カルビンとウエスレーとの間に共通點があり、カルピンはウエスレー主義の如くに嚴格に生活し、ウエスレーはカルビン主義が神につき説く

如く恩情的であつた。丁度その如く根本主義を奉ずるものも、高等批評を採る者も、末輩はいざ知らず、眞摯なる聖書の研究者、純眞の信仰の奉持者には深い處に於て一致がある。善き根本主義者が聖書の信仰を維持せんために極力つとむれば、善き近代主義者も亦、聖書中に混入する雜物を去り、聖書が聖書たる本質を明にし、以てそれが眞實に神が人類に語り給へる大眞理の啓示の書である事を明かにしやうとしてゐるのである。

正しい意味での高等批評は決して聖書を毀つために來たのではない。却つて之を固うせんとするものである。之を惡魔外道呼ばはりして恐れて近よらないのは、その人に信仰があるからではない自ら信ずる處少なく、固き信仰がないからである。

今や聖書學者の驚嘆すべき熱心なる研究の結果、聖書全部は一應元の本源に解體され、更に之を大體に於てその書かれた時代時代の順序に組直

す事を得た。そして神が次第に神の民の心を啓き、光明を増し、己が御姿をその歴史の種々なる事件に於て現はし給ふて、遂に神の子イエスの出現に至るまでの御跡を辿り得るやうになつた。聖書は之に由つて合理的の書物となつた。

聖書は太陽未だ創造されず、従つてまだ一日を二十四時間とする事の出来ない時に、夕あり朝あり、その一日の間に神が天を創造し六日間にて萬物と人類との創造を終へ給ふたと云ふ如き、魔女が銀杖一振別世界を現出する魔法の書でなくして、此の書に神が我等人類の救を完成し給ふ御意が順序正しく示し、人類の歴史の内には一貫した「彌榮なる御旨」が存する事、聖書六十六卷は、始めから終りまで、一つの目的で書かれた一書である事が、我ら近代人の頭腦に充分に納得出来るやうになつたのである。

十一 高等批評の消極的方面

此の聖書の高等批評の結果は、之を二方面から見る事が出来る。第一は否定的方面であつて、聖書は何でないかを明にするものである。

一、聖書は科學の教科書でない

聖書中には、天文學、地質學、生物學、人類學、心理學等の事柄が多く記載されてある。然し乍ら聖書の眞價は此等の科學上の知識を我等に提供するところにあるのではない。聖書中の此等の學問上の知識は現代の進歩した科學より見れば、甚だ不完全であり、誤謬の存在する事を否定出来ない。此等は之を書いた時代時代に於ては驚く程發達した、その最高の科學的知識であり、神に導かれる者は深い科學的視力を與へられる事の善き證明であるが、科學は進歩する。故に聖書中の科學知識は永久に亘り不易の眞理ではない事も明である。聖書を科學思想發達史の材料とし、又此の知識より所謂「聖書神學」を組立てる事は興味ある事で

あるが、聖書が我らに與へられた目的はそこに在るのではない。

聖書の本來の目的は、此の天地萬物は神が創造し給ひ、神が己を現し、人を完成し給ふ御意を語るにある。此の事は明かに科學の研究領域以上のことであつて、科學は之に對し否定することも肯定する事も出来ない。それ故に聖書中の科學思想と現代の科學思想、例ば進化論との調和を計る事は必ずしも重要な事ではない。聖書にはそれ自身の目的がある。若し聖書が從來科學の研究上に貢獻し、今後益々貢獻するところありとせば、否、大にあるところのものは、聖書は人々に科學研究の熱心を喚起する事である。此の洪大無邊の宇宙が一つなる神の御意に由つて創造されたものと信じて、その中に在る法則探究の熱心は勃然として起り來るのである。

加之聖書は科學研究者に高潔無私、眞理を眞理

として愛する心、利慾我執、權勢に捉はれざる公平と云ふが如き品性を提供する。此等は科學者たる必要資格である。然し聖書そのものは、決して科學書ではない。その中に在る科學思想は決して萬代不易の眞理ではない。

二、聖書は歴史の教科書でもない。

前に述べたやうに舊約聖書中に收められたサムエル前後書及び列王記と歷代志略との間にはイスラエルの歴史上の事實に於て齟齬するところがある。高等批評は之を其の文書の内容よりして、又當時のバビロン、アッシリア、エチオプト等の歴史と照應して、サムエル書及び列王記を歷代志以上に正しと認める。其の他聖書中の歴史上の事實は、當時の誤り易き人が傳説によつて書いた記事も混入し、一言一句悉く絶對的に信憑するに足る歴史的價値ありとは認められない。

勿論かく云ひて聖書の歴史は信するに足らずと

云ふのではない。聖書程古代史研究上重要な材料を提供する者はなく、又此の研究を刺激した者はない。一時その史的價値が疑はれた聖書は近年却つて大いにその價値を増し、信憑の度を加へつゝあるのである。然し乍ら聖書を以てアダム以來の人類の無謬なる歴史と見る事は出来ない。

三、聖書は道德の教科書でない。

現代に於て、聖書の眞理を熱心に擁護し、之を以て「生命の書」とし、唯一の生活の指導とする者は、聖書を以て科學の書にあらず、又歴史の書にあらずと云うても然らしくは驚かないであらう。

然し乍ら一度、聖書は道德の教科書にあらずと云はゞ、恐らくは青筋を立て、怒るであらう。されど事實は事實である。現代の道德觀念に照し聖書の道德は遙かに高く、否、例ば山上の垂訓の如きは天に達する程なる崇高なる道德上の教訓である事は何人も疑はない。されど聖書中に在る道德

は、創世記の始めから悉く現代の道德觀念以上であるとは云ひ得ない。若し之を疑ふ人あらばノアに關する或記事其の他を、己が子女の前に高らかに讀み上げ得るか否かを思へ。聖書、殊に新約聖書の精神は戰爭を罪惡とする。されど創世記の記事を採用し、奴隸の存在は神の御意なりとして之を辨護する者があつたやうに、聖書中には次の記事もある。神はサムエルに命じて云ひ給ふ。

今行きてアマレク人を撃ち、其有てる物を悉く滅し盡くし、彼等を憐む勿れ、男女、童稚、哺乳兒、……皆殺せ。

そしてサウルはサムエルの此の言に背いた。時にエホバの御言サムエルに臨み「我、サウルを王となせしを悔ゆ」とある。(サムエル前書一五)

之を要するに聖書は始より終りまで一貫して神が人に求め給ふその道德上の最高理想を教へたものではない。

聖書は神の御言である。然しそれは肉に在つて弱き、不完全なる人間を通じて示された神の啓示である。生れ出た幼児はその視力弱く、光明をそのまゝに接受する事は出来ない。その眼が光明になれ、之を接受する能力が加はるに從ひ、次第次第に周圍が明かに見えて來るのである。先づ母の顔を見知る。やがて漸次に自分の住む世界の有様を見るやうになる。その如く人類も亦漸次神の光明に接し、段々と高き道德を知るに至るのである。然かも一度光明に接するや、更らにそれ以上の強度の光明を受け得る能力が生ずる。かくして次第にその理想は高まり、遂に天上にまで達するに至るのである。之を要するに聖書は始めから人類の最高の道德を示せるものではない。

十二 高等批評の積極的方面

然らば聖書はそも如何なる書であるか。高等批評はその否定的方面に於て、我等が聖書に對する

舊來の觀念を打破した。然し乍ら高等批評は他に積極的方面をもつ、我等は之に由つて一段と聖書本來の性質を明にする事を得たのである。即ち聖書は如何なる意味に於て神の言であるかを明にしたのである。

それは聖書は始めから終りまで人と神との關係を示す書である事である。天地生成の由來そのものを語る事は聖書の目的ではない。人類の歴史を正確に示す事も亦、聖書の目的ではない。又人の道德そのものを語る事もその目的ではない。聖書の語らんとする事柄は、神が如何なる目的を以て人を此の世界に創造し給ふたか、又如何なる途を以て人類の罪の墮落の悲痛絶望状態から之を救ひ、遂に永遠の生命を之に與へ給ふかを示す事である。

一言を以てせば、人が眞に神の創造の御旨に適ふ人となるべき途、その道德の本源なる神に達す

る方法を示す純粹の意味に於ける宗教書である。

一面に於て聖書は空しくして形なく、暗黒全面を覆える人の心のうちに、力入り來り、生命生じ、かくて靈魂は渴ける鹿の如くに神を慕ひ、遂にキリストの内に輝く充溢を見出した記録である。それ故に人若し、己が心の暗黒、墮落、腐敗の状態を知らんとせば、又それあるにも拘はらず、人中に大なる希望あり、輝く未來の存する事を知らんと欲せば、聖書は之を示す。人間本來の罪戾とその極悪性、そのための絶望状態、死、然かも神に由る救の可能、聖者たり得るの希望、その將來の光明、永遠の生命、之等は聖書なくては我等に示し得ない真理である。

かく聖書は人の心を明に示し、次第に神を求め、神を見出した記録であると同時に、聖書は又他の方面に於て神御自身の漸進的自現の記録である。

神むかしは預言者たちにより、多くに分ち、多

くの方法をもて先祖たちに語り給ひしがこの末の世には御子によりて我らに語り給へり、(ヘブル書一、一)である。

次第次第に神の自現は預言者を通じて明白となり、やがて時満つるに及び御子を遣し(ガラテヤ四、四)給ふたその順序を示すのである。「御子は神の榮光の輝き、神の本質の像にして、己が權能の言をもて萬の物を保ちたまふ」(ヘブル書・二一三)。「我を見し者は父を見しなり」(ヨハネ傳一四・九)と云ひ給ふた者である。

その地上の謙遜なる愛の御生涯に由つて、いと高き天に座す神は、かくまで我等一人一人の靈魂を愛し、そのためには己を棄てて、永遠に我等罪人の友となり給ふ方である事を知らされて、我らの人生觀、宇宙觀は一變するのである。此の世に於ける價值は全然顛倒し、尊きものは巨萬の富にあらず、帝王の位にあらず、一人の人間の靈魂、一

それは如何に落魄し、兇惡であるとも、尙も神はその御子イエスを惜まず之に與へんとし給ふ程に之を愛し給ふと知つて、その貴さを知るのである。

人間の罪の極悪性は、此のイエスを十字架に釘けて殺したその時の兇惡に由つて知られ、神の愛の深さはその時神の子が之に耐え、その罪の赦しのために祈り給ひし事によつて知られる。かくて我らは思はず知らず叫ばざるを得ない。「我等何處にゆきて汝の御前を離れんや」と。假令我が心神に敵し、御子を殺す程なる兇惡であつても、神は我らを愛し、自らその苦難を忍びて、我らに永遠の生命を與へ給ふ。かゝる神は聖書以外に何處に見出し得るか。キリストを仰ぎ見、彼を信する者は神を知る。神の愛我が全身全心全靈を覆ふを感じる。まことに神はキリストに在りて我らに現れ給ひ、我らはキリストに在りて神を愛し、神と一つ

たる事を得る。聖書に由つて我らは始めてそれを知るのである。

十三 小なる經驗

暫らく私自身の拙なき經驗を語らしめよ、私は青年時代の或る日月極度の煩悶、懊惱に陥つた。神が全く見えなくなつた。否、神が恐怖の王として私の心中眞つ黒暗のうちに臨み給ふたのを感じた。私は自分の靈魂の絶望状態にうめいた。轉々懊惱した。その時私は地獄の恐怖のごんなものであるかを經驗したのである。實に恐ろしかつた。私は苦しさに堪え得ず、或る夜うめき乍ら新約聖書を開いた。

其の時雷光の如く私の眼前に輝き出た文字は「我は生命なり」とのイエスの御言であつた。次に耳に聞えた語は「我は亡せたる者を救はんとて來れり」との御言であつた。その時の聖書は確かに文字ではなかつた。神の生命の言であつた。私は

私の耳にイエスの御言を明白に聞いたと感じた。それのみでなかつた。私は私の眼に榮光の主イエスが四方暗黒のうちに現はれ給ふたのを見た。

精神病學者は或は云ふかも知れない。私はその時精神錯亂の結果幻覺に襲はれたのであると。然し乍ら、私にとつてはこれ程の事實はなかつた。私は氣違にならなかつた。否それ以來言ひ知れぬ平安を感じた。私の心はその時以來一變したと云つてよい。その時私は死から復活したのである。私の國はその時現在眼に見ゆる此の國から天に移されたのであつた。今その時の事を回顧して此の筆を執りつゝある時、既に二十年を経過した今日、今尙感激に心は燃え、眼に涙は溢れるのである。

キリストは私の主、而して私の救主、私は彼のもの、私の生命は悉く彼に在る。彼が私のため代つて十字架の死を遂げ、私の罪の一切を處分して下さつたと知つて、私は眞に心に平安を感じる。

罪責の重荷より全く解放されて、天空海潤、眞の自由を感じる、何人に對しても一個の獨立人である事を知る。私は今尙罪を犯す。私の愛國心には限りある。人に對する私の愛は甚だ少ない。されど彼の私に對する愛は無限である。私と彼との關係は例ば水源と水口の如し、生命は混々として限りなく彼より來る。私が依つて立つところ、私の全生命のあるところ、私が一身を献げてその爲めに生き、そのために死せんとするところのものは彼である。彼ありて私がある。彼なくして私はない。

私は此の時以來明白に何人にも私は基督者であると告白するに至つた。爾來少しばかり私も稍患難に似たものに遭つた。私にも暗い日があつた。又ある。或時はつまらない事で人に痛くもない腹をさぐられた。私の愛する長子死し、次で私も病を得て十二年、或る時は重き病に臥し、自分と自

分の家族の將來を想ふて暗愴として、思はず涙は枕を濕ほした。餓狼は前門に在り、自分に之を追ひ拂ふ學才も徳もない。之を思ふて眞に心細さを感ずる。然かも此の時私を勵まし、私に希望を與へ、私を沈鬱より引上げ、歡喜と平和の人たらしめるものは、實にかの時の經驗に由り知つたキリストであり給ふ。

私自ら顧みて自分の道徳は少しも高くない事を知つてゐる。又私の才能の低い事を知つてゐる。若し聖書知識、科學知識、人に盡す能力等を以て私を計るならば、私は基督者と云ひ得ない。

「聖徒」の一人ではない。それにも拘はらず私は大胆に基督者と云ひ、神の者と云ひ得るのは、聖書の文字が眞に私の生命となつて感ぜられたその日「實は夜」からである。

されば人が聖書を何と云ふとも、私には確に神の御言である。此の書なくして私の生命はない。

聖書無謬説は私はとらない。私は高等批評の結果に興味を感ずる。然し乍ら私が聖書を以て神の御言と信ずるのは、高等批評の結論に由るのではない。私自身の經驗である。私は前に掲げたウエストコットがルーテルを評した語を讀んで、自分自身の經驗に照らし、同感せざるを得ないのである。かくして私は高等批評家が聖書の全部神言説を破壊し、無謬説を毀つも、尙聖書の神言を信ずるのである。英國の高等批評の鼻祖と云はれ、そのために教會から逐はれたロバートソン・スミスは云つた。

若し私は何故聖書を神の御言とし、信仰と生活との最も完全なる規準として之を受容するかと問はれるならば、私はプロテスタント教會の凡ての始祖たちと同様に答へるであらう。それは聖書こそ、神が人を救ふ愛の唯一の記録であり、聖書の中にのみ、キリストに在つて神が人に

近づき、我らを彼に在つて救はんとし給ふ御意を現はし給ふところの神を見出すからである。

私は此の記録を真なりと知る。何となれば私の心の中に在る聖靈に由つて確信させられるからである。即ち神御自身以外かゝる言を私の靈魂に告げ得るものはないと云ふ事を。

同じく高等批評の大家、マークス・ドッドは云つた。「此の書の教ふるところに服へば、きつと君を神にまでつれてゆくであろう」と。されば聖書を熱心に讀め。それを心から受け入れよ、然らばきつと、何日かあなたはキリストによつて神を知るに至るであろう。人の一生中、神を知る位重大事件はない。死後數億年否永遠にまで我らの靈魂は之に影響されるのである。さればグリフキス・ジョーンズが「人類の終局的運命は此の書に對する態度により定まる」と云つたのは眞理である。

シヤツクルトンの經驗

神がどうして我等と偕に在して我等の弱きを援け、窮乏より救ひ給ふか、實際自分が行詰りに遭ひ、萬策盡き、生死の境に彷徨うた時それがわかる。

私は最近此の事について興味ある記事を読んだ。それは南極探險で世界的に有名であるシヤクルトンの手記である。彼は象が島に残して置いた一行を救はんがため、同勢三人、「私が南デオルチャの氷の山と氷河との上を三十六時間の長い道中、私共は三人でなく、四人であると度々思つた。ウオルスレーもクリンも亦同じ考をもつた」と云つて居る。何者にも頼る望の絶えた時、今や死の暗黒が襲ひ來らんとする折、「されど我ひとり居るにあらず、父われと偕に在すなり」とイエスは宣ひ、「われ汝と偕に在りて汝を救はん」とエホバはエレミヤに宣ふた。我等も亦此の經驗の上に立つ。

エ レ ミ ヤ 記 の 研 究 (八)

申命記の發見と宗教改革(下)

江原 萬里

改革の失敗

抑もヨシア王の此の改革は、古來史上幾度か行はれた社會的政治的又宗教的改革中、その動機の純真なる、其の目的の崇高なる、その計劃の徹底なる、人間の試みたる改革事業として是以上のものを史上に求むることは出来ない。其の精神の崇高なるは、近世に行はれ、又現今行はれつゝある諸改革諸革命が物質的であるの比でない。近代の改革は皆外形的制度の變更に重きを置く。然るに此の改革は精神的であり、且つ制度的であつて、兩方面を兼備した。加之其の精神的方面に於て達成しやうとした目的は、單なる人間的理想でなく

して天啓の書なる申命記に基き、神の聖意を實行して以てイスラエルの民が神の民としての任務を完くしやうとするものであつた。

かく國民的組織的宗教としては未だ嘗て之に比ぶべきものを見ず、殆んど完全とも云ふべき此の申命記改革は、遂に失敗に歸したのである。王の誠意も、國民の熱心も、此の改革に由つて國の滅亡を避ける事を得なかつた。彼等の罪は此の悔改の運動を以て贖罪あがなはるべくもなかつたのである。

エレミヤは今や此の改革の失敗が歴然として彼の慧眼に映じ來るのを感じた。彼は以前から、神より國の滅亡を預言せしめらるべく命ぜられた者であつた。彼は熱心に改革を賛成したとは云へ、此の事を忘れる者ではなかつた。今や大改革は誠意を以て遂行せられたが、然かも之を以てしても民の惡しき念は少しも除去せられず、舊き罪は新らしき形に於て顯はれ來るのを見た。現今行はん

としつゝある凡ての社會的諸制度の改革も亦結局此の失敗を繰返すものに過ぎない。エレミヤは人の心の念のかくも頑固にして少しも改らないのに驚愕し且つ痛嘆した。

四 人たほるれば起き上り、

出行かば歸へり來る。

五 何故此の民のみは離れゆき、

恒に離れてやまざるか。

彼等は虚偽に執着し

歸へり來るを拒むなり。

六 われ耳を傾け聽きたるに、

彼らは只虚偽のみを言ひ、

一人だにも惡を悔ひず、

我爲せしこと何ぞと云はず。

各々まつしぐらに馳けり入る

戦場の馬にさも似たり。

七 大空このとらの鵠すらも

その季節を知り。

やまはとと燕とは

その來る期を知る。

唯我が民のみは知らず

エホバの御掟おきてを。

八 汝何ぞ云ふ「吾智し、

我らにエホバの律法あり」と。

されど視よそは偽となりぬ、

書記たちの偽筆に由りて(第八章)。

人倒るれば起き上り、家を離れば歸へり來る、これ人の天性である。大空を馳る鶴も雁も燕も其の去來に時期を違へない。これ彼らの本能である。我らはなんぢに向ふやう作られたり、されば我らは汝のうちに憩を得るまでは、安息を得ることなし」とアウグスチンが云つた如く、人には之に似た宗教的本能があつて、若し惡習慣のため此の本能が破壊せられず、妨げられない限りは、我

らは天性に従つて、神を慕ひ、神に歸へり來るべきものである。然るに我が民は、あゝ我が民は既に此の本能を喪失し、神の掟を感知しない。

宗教は心の事である。人各々その眞心に於て神を信じ神に仕へる事である。それは聖書の文字を理解する事ではない。その命令を文字通りに實行する事でもない。神殿に集り、犠牲を献げ、祭禮を盛大に舉行する事でもない。まして社會的又は政治的改革を企て、又社會組織の變更をすることではない。神を知り、神と同じ心になることである。神がその創造し給ふた萬物と己自身とを、神が見給うやうに之を見ることである。神の悦び給ふことを喜び、神の憎み給ふことを憎む事である。それ故神と義しき關係に在る事は、我等の行爲が外形的に規律正しくあることを云ふのではない。諸制度が完備することでもない。心だに神を知り、神と義しくあり得ば、それらは自ら外に顯はれ、

自ら善き事業が行はれ、善き社會が出現するのである。

視よ、此の國民的組織的宗教の大改革は遂に失敗に終つた。それは外なる改革であつて心の眞底の改造でなかつたからである。イスラエルの民の罪は之を以て除かれなかつた。既に神に背き、神を忘れ、その心に植え付けられた本能を以て神を慕ひ、神に歸へり來ることをしなかつた彼等に、此の大改革を以てしては眞の神を知らせる事が出來なかつた。

かく云へば彼等は答へる。否、我らは神につき無智ではない。我は智し、我らにエホバの律法あり(前掲八・八)と、彼等は云ふ。申命記は神の聖意の啓示ではないか。之を有つ限り我らはエホバを知ると。エレミヤは之を反駁する。然らず、汝らの律法は書記たちの僞筆に由つて虚偽となり終つたと。

サドカイ主義とバリサイ主義

ヨシア王の申命記大改革の總決算は二つの新事實の發生であつた。その一は、エルサレムの神殿に於ける禮拜の集中に由り、バアル崇拜は已んだが、其の代りに神殿崇拜が新に生じ、エルサレムに神殿のある限り、而して國民一致してそこで神を拜する限り、こゝに鎮座し給ふ神は永久にイスラエルの民の神であり、彼等の國を守護し給ふ故に、國は滅びることは絶對にない、否國は益々榮え富むであらふとの迷信である。それがため神殿と禮拜儀式とに關する諸制度は「書記の僞筆」により申命記に附加せられ、レビ記等の所謂 Priestly Code が生じたのである。エレミヤは此の儀式を虚偽空虚として排斥したのである。

萬軍のエホバ イスラエルの神がくいひ給ふ。汝ら犠牲と燔祭の物をあはせて肉をくらへ。そはわれ汝等の

先祖をエジプトより導きいだせし日に、燔祭と犠牲とに就て語りしことなく、命ぜしことなし。唯われ此事を彼らに命じ、汝ら我聲を聽かばわれ汝の神となり、汝ら我が民とならん、且つわが汝等に命ぜし凡ての道を行みて福祉を得べしと云へり。されど彼らはきかず其の耳を傾けず、己が惡しき心の謀と剛愎なることにしたがひて行みまた後を我にむけて其の面を向けざりき(七・二二——二四)。

此の驚くべき宣言は、一讀、申命記否認の如くに聞えるが、そうでない。エレミヤは其の始め、異教的儀式排除の手段として申命記の神殿禮拜集中主義及び其の儀式採用に賛成したのである。然るに改革の進行につれ神殿及び其の禮拜が儀式中心となるに及んで之に反對したのである。

宗教的儀式は出埃及前にも既に在つた。エレミヤは禮拜の儀式、教會制度其者に反對したのではない。之を以て神が彼らの神となり給ひ、彼等が神の眞の民となるために必要條件の如く思推す

る、祭司主義に反對するに至つたのである。

由來イスラエルの宗教の特色は儀式になく、嚴格なる道德即ちモーセの十誡に在つた。曠野にて彼らが神の民として神から命ぜられたものは儀式の嚴守でなくして、律法の勵行であつた。わが汝等に命ぜし凡ての道を行みて福祉を得べし」であつた。それによつて「我聲を聞かばわれ汝の神となり、汝ら我が民となるべし」である。

然るに彼らは律法を嚴守して、心を盡くし精神を盡くし思を盡くして主たる汝らの神を愛せず、「また己の如く汝の隣を愛」しなかつた。只管に神殿と儀式とに依頼して、神民の關係を義しき關係に復歸し、その祝福を得やうとしたのである。此の祭司主義がヨシア王の改革の豫期せざる産物として新に盛となつたのである。神殿の祭司は前に述べたやうにザドクの後裔が之に任ぜられた。後世のサドカイ人は之であり、現世的教會主義はこ

ゝから出た。

ヨシア王の大改革の結果新に生じた第二の顯著な事實は、新に「律法の書崇拜」が生れたことであつた。抑も申命記は前に述べたやうに、イスラエルの民が眞のエホバの民となり、エホバが彼らの神となり給ふために、一方には祭祀につき神殿集中を規定すると同時に、他方國民の日常生活の各行爲について細則を設け、「心を盡し精神を盡くし力を盡くして主なる汝の神を愛し」又「おのれの如く汝の隣を愛すべ」き二大誡命を適用したものであつた。

それ故一方禮拜の神殿集中は神殿崇拜の迷信に墮すると同時に、他方誡命尊重は律法の書及び其れに遵ふ外形的行爲の尊重となり、聖書を熱心に研究し且つ之を實行するならば、神と民との關係は義しくせられ、いつまでも祝福を受け、國は安泰であるとの思想からして、次第に自分よがりの

律法的行爲主義となり、遂にバリサイ主義に墮するに至つた。デビドソンの有名な語に「申命記とバリサイ主義とは同日に生れた」と云ふのはそれである。

彼らはサドカイ人の如く、神殿に於て神を祀る限り神の祝福を受け得るとは考へない。彼らは無教會主義であつた。彼らは律法の書に在る誠命を勵行し、神を愛し人を愛し、日常生活の嚴肅常に義を慕ふことによつて神の救を受け得ると信じた。此の點はエレミヤも異論はなかつた。

只エレミヤと異なるところは彼等にはエレミヤのやうに神と直接なる靈的交際がなかつた。それ故律法的行爲は次第に外形的なる規則づくめとなり、人の行爲を批評し、自己の行爲に對し自惚れが生じた。其の内にはエレミヤの終生の友人シヤバン一家の者もあつたが、大多數は此の弊に陥り、エレミヤの迫害者となつた。職業的なる「僞の預

言者」がそれである。エレミヤを苦しめた者にして彼等の如きものはなかつた。

申命記改革の結果は神殿集中となつて神殿の祭司に實權が移り、之からして教會主義が生じた。そして今まで祭司と協同して改革に熱心であつた「預言者たち」は之に反對して無教會主義を唱へてバリサイ主義に墮した。改革後は此の二派が對立するに至つたのである。そして各自己を正統派とし、イザヤ以來の預言の精神を各々自ら把持すると確信して互に反目するに至つた。然し唯一つ彼等相互に共通のものがあつた。

それは兩者共に彼等が信する通り、或は神殿の禮拜を勵行し、或は律法を嚴守するならば、彼等の過去の罪は既に赦され、いつまでも國は滅びる事はない、神は外敵を防ぎて國に平安を民に繁榮を與へ給ふと信じた點である。彼等は共に「民の傷を淺く癒して平康やすからざるに平康、平康と云」

つたのである（ハ・一〇）。此の抜き難き輕薄なる樂天觀が彼等双方の共通點であつた。

エレミヤの慧眼

エレミヤは慧眼早くも改革の失敗を洞見した。

民の罪は此の改革に由つて革新されず、國の滅亡は只時期の問題であると感ずるに至つた。大改革は實行せられ、國は平穩無事、敬神の念盛にして興國の精神勃然として起り、朝野を擧げて諸弊改革に熱中し、國民皆前途に多大の希望を懷きつゝ、ある時、彼は唯獨り、その中に亡國の徵を歴然として見たのである。

エレミヤは今や神の預言を明白に樂觀的なる首府エルサレムの市民、殊に頑迷なる祭司及び預言者たちの耳に告げねばならなかつた。改革に際して、己が兄弟たち郷里の友人たちに憎まれて生命をさる奪はれやうとした彼は、今や「ヨルダンの

叢に入り込み、「騎馬者と競」はねばならない。一國の最強力者たる祭司、最有識者たる「預言者たち」をその敵として、只一人、全ユダ國民に眞の神の預言者としての任務を盡くさねばならなくなつた。

彼に後るゝこと六百餘年、ガリラヤ傳道を終えて今や天に上げらるゝ時の來れるを知り、「御顔を堅くエルサレムに向け」て進み行き給へるイエスの先驅者を、私は此の時の彼に於て見る。さあれ、内氣にして婦人の如き孱弱なる感情を有つて生れたエレミヤが、神の御言を信じて起ち上るや、神に導かれて一難又一難、水火をくぐる毎に次第に、彼は百鍊鐵をも斷つ如くせられ、遂に背戻の全國民に對して神の御言を守る「鐵城銅壁」となつた。奇しきは神の御言の力よ、又これを信受したる時の人間の性格の變化よ。

受難週間の研究 (一)

エルサレムにて遂げんとする彼の死

小 栗 襄 三

秀峰ヘルモン山上の残雪が、青藍滴るガリラヤ湖上に、其の姿を寫し、湖畔の原野に點々と咲き狂ふ野花に、碧玉の空に囀る小鳥の歌と共に、三々伍々此處彼處より來り集ふ牧者なき羊の群に、神の國の福音を述べ傳へ給ふたイエスの公生涯の初めは、誠に荒び荒んだ、此の世の生活に喘ぐ羊群には、ヤコブの井戸の旅人の涸きを癒すが如く、又砂漠のオアシスに旅路の疲れを憩ふ隊商の群がるが如くに彼を慕つた。神の國の福音の宣べ傳へらるゝ處、生命の泉は湧き流れ、人々はその教に驚きかつ感謝の念ひに滿ち溢れたであらう。

乍併ら、誰か此の神の獨子に、三年後エルサレ

ムのカルバリ山上に十字架の處刑が準備せられつゝありしを豫測し得た者がゐるたであらう乎。イエス御自身さえも、彼の荷負ふ可き苦難が十字架の極刑なりしを憶はれたであらうか。ガリラヤ湖畔に展開されし彼の生涯の序幕は、餘りに朗かであり、餘りに美しくあつた。ゴルゴダに開かれし彼の地上の生涯最後の終幕は餘り酷く、餘りに凄慘である。

乍併ら、此の終幕こそは、全人類の救済を左右する出來事であつた。此の十字架上の死なくして全世界の救済は完成せられないのであつた。彼は神の御前に跪き、授けられた苦杯を、最後の一滴迄も飲み干され、完全に獨子の使命を成就せられしのみならず、全人類の救済を完成せられたのである。

山上の變貌は、恐る可き陰慘の終幕を飾る光の

序曲であつた。一瞬の閃光は、彼を覆ひ包み、天國の榮光の宙に、彼はモーセとエリヤに相會した。彼の顔貌は太陽の光の如くに輝き、衣は白く眼も目映いばかりに光を發した。今や遂に彼の使命を果す時は、眼前に迫りつゝあつた。時に何事か重大事を告ぐるが如く、神よりの使者モーセとエリヤは來り、彼に聖召を傳へるのであつた。

イエスのエルサレムにて遂げんとする逝去の
ことを言ひわたるなり。(路九〇三)

と。神の使者モーセとエリヤは榮光の中に来り、彼に物語る總ては、エルサレムに於て完成さる可き十字架の死に就てであつた。誠に此の會見は、「悲しみの人」の現世に於ける最後を飾る榮譽の會合であると共に、又恐る可き死の宣告であつた。イエスの苦惱は如何ばかりであろうか。彼を勵まし、慰むる聲は『こは我が愛しむ子なり、我これを悦ぶ』(彼後二〇七)と天よりの御言のみであつ

た。神の命を喜ぶ彼と、死に直面せる彼とは、我等の想像に餘る内心の鬭争の苦痛に呻吟した事であらう。榮光と死、兩者の對照は餘りにも悲惨である。

此の死の宣告が神より傳へられた時に、二聖徒の天より來りて立會はれし事は、イエスに取つて如何に力強き事であつたらうか。人類最初の救世者、イスラエルをエヂプトより導き出し、贖罪の制度を民に開きし彼のモーセと、人類最初の預言者、サタンを足下に蹂躪せしエリヤ、共に來り會し、此の大事業の相談に參與し、彼と相語つた事は、來る可き十字架上の死を、勵まし、慰むるに如何ばかり力になつた事であらう乎。今や嚴肅に死の宣告は下され、彼も亦メシヤとしての自覺に甦つた。斯してゴルゴダへの序曲は切落されたのである。

側らに侍して此事件を目撃せし三人の弟子が、

自己の意識を取戻して、再び主を眺めた時に、其處に現はれしはイエスのみであつた。彼の教訓と奇跡に心奪はれてゐた彼等は、眼前に彼の榮光を拜した。乍併ら、此事實の意味も解釋も付かなかつた。此は唯一人孤獨なるイエスのみが心底に刻みし事件であつた。現世の何人に理解せらるゝでもなく。弟子さえも彼の受く可き苦難を知らず。唯知るは神と聖徒のみであつた。かゝる悲劇が何處にあらう乎。彼の受く可き苦難は今や明白に具體化された。此の苦難のみに由つて完成さる贖罪は彼の死に由つてのみ成就せらるゝを。して彼のみが踏まねばならぬ荆棘の道であつた。

イエスは既に此の事のあるを豫期してゐたであらう。然し今は明瞭に命令は降つた。それはエルサレムにて完成す可き死を。又完成せねばならぬ死を。

又神は其獨子にして愛子を、十字架に送る門出

に、彼の姿を甦りの態に等しく着飾らしめ、彼の愛弟子二人を送つて、彼の死の旅路を祝し給ふたのであつた。獨子を十字架に付けるに由つて、神は永遠に人類の贖罪と救済を確立せん爲めに、此の道を選ばざるを得なかつたのである。

それ神はその獨子を賜ふほごに世を愛し給へり、すべて彼を信する者の亡びずして永遠の生命を得んためなり。(約翰三〇十六)

であつた。

バレスチナの最高峰ヘルモン山上に、イエスの現世に於ける生涯の最後の幕は切開かれた。これより彼の御顔は堅くエルサレムに向けられ、十字架の道へ、十字架の道へと突進された。人類の王此世の救世主は、今や自覺に醒め、神に愛せられつゝ、一步、一步、時満ち、此れより明白にメシヤの苦難と死と復活を弟子等に教えつゝ、神の都エルサレムにて遂げんとする彼の死の道へ。

柏 木 通 信 (第十六信)

齋 藤 宗 次 郎

柏木の近状

○全集第一回配本 神、曾て日本に於て其選びし福音の一使徒に對し、數十年に亘りて啓示し給ひし尊き御心は、瀟洒たる地の衣を纏ひ、内村鑑三全集第五卷の名を以て、白雪の富嶽を背景とせる帝都の中央から現はれ出た。此産を懐にせし日本國の光榮と幸福とは何たる重さぞ。二千餘年を連ねたる世界無比の日本歴史は、茲に始めて真正の意義を發揮すること、なつた。假令現在の左右兩極面に跳梁する變狂あるに拘らず、空寂たる彼等の鬪奔する皮相日本を外にして、不動不變の心靈的國礎は嚴然として据ゑらるゝ、に至つた。

○一九三〇年六月、靜かなる御聲を以ての全集發刊の命を仰ぎてより茲に二十二個月、其間に於ける無能無經驗なる弱き編輯員を憐み助けて、絶えず途を示し、蒙を啓き、我身を殺し、障害を排し、犠牲を起し、信賴と希望とを與へて、聖旨を遂行し給ひし跡を尋ね見る時には、斯くまで深く此業を愛し給ふかと感涙に咽ぶものである。

○毎朝祈を以て仕事は始まる。一枚の原稿、一片のカー

ド、一語一句一字一畫一點、其處に全注意は注がれる。

基督の爲め國の爲め！誠に恩師の文は同胞の救ひの爲に書かれし文字である。我れ黙々として獨考へ、獨味ひ、獨樂み、獨勞するに耐へない。神を愛し國民の靈魂を愛してのみ爲し得る業である。即ち中餐の憩ひを利用し蠻賊の様な勞働姿其儘を、或は新宿の廣場に、或は東京驛の待合室に、或は銀座の街頭に、或は本所深川のバラック街に移して、道行く人勤く人等、あらゆる人々の顔に神の像を認め、キリストの面影を汲み取つて後、敬虔の念、同情の涙を包んで歸り來る。これも亦編輯事務の一部である。其何の爲であるかは釋明することは出来ない。○始めて當る校正の仕事である。校正畏るべしと恩師の屢々言はれしことを親しく味ふのである。其第一回は六十餘萬字、一字々々を洗ふ様に凝視^{みつ}める。弱き眼には少からず感^たへる。此際何を以て慰むべきか。徐ろに視線を卓外に轉ずれば、眼前の庭先には、友よ來れといはんばかりに數株の松檜、木犀の常綠樹は梢々濃綠の色を泛べて、我眼の疲れを癒し呉れる。更に窓外の上空を仰げは、碧天我が爲に藍を絞りて惜みなく醫液を滴下し來る。我れ居ながらにして此恵みに預る時に、今更ながら愛の結晶たる造化の巧妙なるに驚く。神始

めて之を善しと観給ひしは故あるかな。○全集は其出版期に入つて脚骨の土山本泰次郎氏を新たに其編輯に加へる、こと、なつた。難局に立つ鈴木主任の無二の同勞者として、今より全力を傾けらる、であらう。我等一同の力であり喜びである。○二月上旬、血壓の上昇に依る病の故を以て、大學病院に入院せられし恩師夫人の容態は、其後の経過順調に進んで三月中旬頃には退院せらる、豫定であつた。然るに何うしたことか、三月三日夕、再び鼻孔出血があつて、一週間も後戻りの症状となられた。然し今回は少量であるから、間もなく恢復せらる、ことであらう。我等は只管に全快の早からんことを祈りつ、ある。○札幌なる内村家にありては、今は打揃ふて健康の春を迎へられしとのことである。忘る、ことの出来ない今日此頃、全集の刊行を觀てどんなに慰め且つ欣んで居らる、ことであらう。○多摩に改葬せらるべき恩師の墓地は、現場に於ける一切の手續は名古屋氏により一方雜司ヶ谷に關する交渉は、藤澤氏の奔走によつて滞りなく決定すること、なつた。墓碑の意匠設計は、故人の信仰と天賦とを考へ、次に遺族の意嚮に従ひ、生前の愛と禮とを遺憾なく表示せん爲に、非常なる苦心を見た様である。藤本博士山樹氏夫妻の篤き

注意も加はつて、近々竣工の運びに至るとのことである。

日曜日の集會 誠實に六日間を送る者には、七日目に肉

體の休養を要する。六日間の優渥なる恩寵を回想感謝せんことを冀ふ者には、七日目に靜肅なる時を有つを要する。

六日間の生活戰に於て、勞働の隋力化、事務の無心平凡化に陥らんことに苦心するには、神と直接の交通、援助、支配、教導を仰ぐ安息日を切望する。我等基督者に取ては、日曜日は天國の面影を偲び同時に復活をも味ふことの出来る天賚の日である。これあるが爲に、我等は疲る、を知らず、老い去るを知らぬものである。左の諸氏講壇に立つた

一、天國の福音 佐々木

一、神恩全地に盈つ 寶田

一、約翰傳一章の研究 藤本

一、サムエル書の精神 永井

一、信仰の祖アブラハム 山樹

一、キリストの如くに 大島

○石河講伯の消息 昨年末故國を距つて佛國に向ひし石河光哉氏は、一月十九日エルサレム到着、當分該地に滯留するに決し、其舊市街に借家住ひして自炊生活を始めしとの報に接した。

祖父の書翰 (七)

江原萬里

ミルトンの失樂園を讀んだ者は何人も嘆賞せず居られないのは、そこに畫かれたサタンの剛毅である。テインが英國紳士の好典型と批評した上帝よりも、我等はオリバー・

クロムウエルをモデルとしたと云はれる此のサタンの雄豪を慕ふ氣が起るのを禁じ得ない。天上に於ける戰に敗れ、サタンとその一團とは九日九夜雪崩を打つて、爐火燃えて暗黒を見せしめ、何の光明、何の希望もない地獄へと追ひ落された。然るにサタンは敢然として起ち上つた。彼は決して泣き事は言はない。「敗れた。皆んなおちやんになつた。だが、不屈の意志、復讐の企、不死の憎惡、決して屈しない勇氣、何でも敗けて居ない心、これだけはある。此の光榮は神の怒も大能もおれから之をもぎ取る事は出来ない」と。かくてサタンは神への復讐として新に創造せられた人類を墮落せしめる事を計畫したのである。

然るに偉大其の者の如くに見えたサタンも、一度復讐を實行しやうとしてエデンに入り來るや、始め鶴の姿になつて人を見て羨み、之を憎み、遂に蛇になつてエバに近づき、

ダラダラおべつかを使つて之を誘惑した程下劣のものになつて仕舞つたのである。復讐心はいつでも人を下劣化する。高野の復讐も亦同情より嫌惡となる。

十三人は赦されて獄を出たが、彼等の目的は容易に達し得らるべくもなかつた。それは藩の當路に眞の勤王家が居なかつたのと、一つは時勢が然らしめたのである。

抑も土佐藩を始め長州、肥後其の他の諸藩士が躍起となつて赤穂藩に十三人の釋放を迫まつた時は、討幕運動は切迫し、其の年(文久三年)八月には大和行幸が宣下され、日本を兩分し、關西は天皇直裁、關東は幕府所管とし、且つ天皇は幕府に命じて攘夷に當らしめ、若し幕府が勅命に反する時は、それを名として討幕を敢行する計劃が熟した時であつた。攘夷は國內統一の手段であつたのである。現今支那も此の故智を學んで居る。然るに事爰まで切迫して反動が生じた。土佐の山内容堂は公武合體論に變り、會津・桑名、薩摩の諸藩も亦討幕に反對した。爰に於て朝議俄かに一變し、大和行幸は中止となり、主動者長州藩は京都守護を解かれた。此の結果七卿の長州落となり、翌年七月長藩の家老三人大學して京都を襲ひ、禁裡に發砲し、市を焚いた。之がため討幕と正反對に、長州征伐の詔勅降り、幕

府の勢力頗に擯頭し、勤王の志士は續々捕へられて殺された。かやうのわけで、赤穂藩にても十三人の企圖は容易に實行せられなくなつたのである。爰に於てか彼等及び山下惠助は脱藩して長州に走り、其の軍に投ずるに至つた。

……併シ乍ら是全ク御上ヲ見限り、且重恩ヲ忘却仕候仕儀ニテハ毛頭御座ナク、尙又我身ヲ相立候意ニテハ之レ無ク、何卒シテ皇國ノ御爲メ御家ノ御爲メニ力ヲ盡シ鴻恩ニ報シ奉リ度トノ考ニテ止ヲ得ズ脱藩致候。若シ存命モ仕候ハ、御高恩ノ萬分ノ一ヲモ報ジ奉リ度ク……

之が脱藩の趣意であつた。彼等は長州軍に参加し各地で幕府軍と戦ひつゝ、あつたが、如何にかして自藩の方針を勤王主義に一決せしめ度願ひ、凝議の末其中三人は歸藩し、上書したが勿論聽かれなかつた。内二人は悲憤の餘り藩主の墓所で屠腹して相果てた。その遺書に、爰ニ屠腹仕リ、魂ヲ赤地（赤穂）ニ止メ、御家ヲ補佐シ、一藩ヲシテ正義（勤王主義）ナラシメ度キ懇願ニ候とある。西川梅吉も亦歸藩して事を計ろうとした。過激なる彼の事なれば、多分第二の當路要人暗殺を企てたものらしくある。そのためか同志の間に激論生じ、遂に殺された。

かやうに十三人組の者は勤王のため藩のため、決死の覺

悟で働いて居る間に、村上眞輔の子等も亦決死の覺悟で彼等を親の仇として其の後を附狙ひ、或は撃劔を或は槍術を一生懸命で學びつゝ、あつた。彼等は兄駱之輔が赤穂退去の路を要して殺そうと謀つた藩の青年たちを詮索し、藩を動かして之に刑罰を課せしめやうとし、又十三人中の一人青木のみ長州軍に走らず、殘留して居るのを捕へ、父眞輔殺害當時の陰謀を自白せしめて藩に突き出し、若し自白しなかつたならば其の場で打果す計劃をした。

「青印の一策最妙に御座候へども……萬一計成らず……禍を一族に羅織仕候様相成候ては宿願成就不仕のみならず却て大疵を求候理に御座候……」

「西川初の所在慥かに相分り申候。就ては愈々以て青印の義今少し御控被成間敷哉……」

此の二書は仇討に最も熱心であつた彼等の姉婚なる岡山藩士某が彼等に遣つたものである。彼等は次第に勢力を得、藩を動かすに至つた。然るに祖父が危惧したやうに、森續之丞は一身の安全を計るに汲々として、何等一貫した方針なく、公平を行はず、甚しく藩政を紊した。

多分最も不當の處置を受けた者は野上鹿之助であつたであらう。彼は十三人加擔の責を負つて率先自首したのを森

は其の儀に及ばずとて之を赦したのみでなく、恩賞し、後之に謹慎を命じ、老候に由つて之が解かる、や、此度は西川を殺した疋田の傷を手當した廉を以て、二年以上入牢せしめ、遂に之を放逐するに至つた。

野上は已を得ず赤穂より二里外の周世村に寓する事となつたところ、村役人は即時村の退去を求めた。其の時は既に夜更けて居たが、已むをなく彼は十歳及び六歳の子を連れて行く目當もなくそこを立ち出でた。然るに豫てより路に待ち伏せして、た曲者二人立現はれ、矢庭に切りつけた。野上は刀を抜いて立會つたが最初の深傷のため遂に斃れた。此の時彼の妻即ち祖父の姉は脇差を彼に渡して彼をして切腹せしめ、立派に武士としての最期を果させたとの事である。其の時あはて、取落した小刀に由つて、黑暗中から立現はれた此の兩人が村上の子等であつた事が知れた。往時親の仇討は武士の最高の美德の一とされた。然し乍らかゝる卑怯なる暗打ちは武士の恥である。

翌慶應四年、幕府は大政を奉還し、明治維新となり、大赦會は發布され、維新の際敵味方に分れて切合つた一切の罪は悉く水に流される事となつた。此の年十三人の残存者は長州より赤穂に歸へり來たが、村上の子等の彼等に對す

る舊怨は尙熾烈であつたため、之を赤穂に置くわけにゆかず、岡山藩に預けて荏苒二ヶ年に及んだ。

明治四年彼等は赤穂に歸還した。藩は彼等に高野山に在る藩主の廟の守護を命じ、體よく追拂つた。此の時山下惠助は憤激して相果てた。かくて残る六人は當時十三歳なる一人の弟を隨伴して世帯道具一式を背負ひ、高野の峻峻を上りつめた時、息つく暇もあらず、そこに待ち伏せして居た村上の兄弟等七人矢庭に槍と劔とを以て彼等に切つてか、つた。彼等はシチリン鍋を背負つた儘戦つたが及ばず、あえなき最後を遂げた。隨伴の少年までも彼等はむごたらしく切り殺して仕舞つた。之が我が國最後のそして最も卑劣なる仇討であつた。若しこれだけの熱心を公事に盡したならばと私は憎み且つ憐れむ。此の年夏祖父は津山に於て暗殺された。兇漢は遂に不明に終つた。

野上鹿之助の遺子二人は長じて復讐の復讐を企てた。然るに彼等は叔父なる野上運海和尙(後京都智恩院門跡)に懇々訓戒されて遂に之を斷念するに至つた。此の事を述べて切々として胸中の苦悶を訴へた、弟なる故鞍馬勇三郎君の遺稿を讀む時、私は同情の涙を禁じ得なかつた。

身邊漫筆

○本誌も號を重ねること半百の餘。發行部數は大體確定し、創刊號以來の讀者が多く、主筆との親密は號を追うて増して來た。本誌は世間の雜誌と異なり寧ろ回覽雜誌に近い。それ故私の個人的記事も幾分は許される事と思ふ。今後此の欄は私の身邊報告、氣焰、訪問者との會談を載せ度い。茶の間で足を投げ出して、茶を飲み乍ら、くつろいで茶話をする。

讀者の方々も此の茶の間に來訪を歡迎し度い。話が思はぬ邊に外れて、友人に飛ばつ散りが掛るかも知れないが幾重にも御容赦。

○藤井全集が豫期を遙かに越えた成功裡に完結した事は何と云つても嬉しい。私は此の事で多くの事を教はつた。就中矢張り神様はあゝる。神様に信頼する事が何より善い事を強く教えられた。それから今一つ、此全集刊行で私の大発見は、凡そ此一年間、帝大教授として澤山仕度い事があつたのを一切犠牲として此の仕事に盡したが矢内原忠雄君の友愛であつた。私は今まで親しく交際して大體同君の性格は知つて居る積りであつたが、此度位同君に對して私の頭が下つた事はなかつた。

○ついでであるからこゝに紹介し度い。同君の舊著「基督者の信仰」が絶版のところ、此度小西友作君が福岡で印刷業を開始されたその最初の事業として之を再版された。基督教の要領を説いた物で、初心の人にも極めてわかりよく書いてある。本誌讀者の方に賀費で御頒けし度い（六十七頁、送料共八錢）。

○私はもう幾年か東京に出ない。従つて舊い學窓の友と會ふ事も殆どない。只私の弱きを同情され、度々私を訪れて慰めてくれる人に矢内原君の外三谷隆正君がある。同君より某氏の研究會に對する好意の理由を聞いて仰かしく思つた。私は他の凡てのものに貧しいが友にだけは富める一人であると思つて居る。若し大阪の田中良雄君の私に對する深甚なる友愛を知悉されたならば、何人も驚嘆せずには居られないであらうと思ふ。私自身こゝんな人が又とあらうかと度々思ふのである。眞實の事はいつか明白になるであらう。本誌があらゆる不利條件の下に在るに拘はらず、今日まで發行が繼續されて來たのも、實は同君の限りない友愛の賜と云つてよい。

○昨年本誌改題前後から私は多くの友人を失つた。然し他方多くの友人を得た。失つた友

人については愛惜を感じるが致方ない。得た友は限りなく嬉しい。其の中新たに山樹侯市君夫婦を知つた事は私には力強く感ぜられた。同君の内村先生を愛する至情、又愛に由つて人生を歩まんとする心には私も大に動かされた。教友會について彼は批評する人があつた。凡ての理論は灰色なり、生命の黄金樹のみ常盤に綠なりである。こう云ふ人があつた。其の間は教友會に生命があると思ふ。教友會には其の他にも之に類する人が多くある。思ふに師を慕ふことは美はしい事である。只大に積極的であらん事を望む。

○私は今まで自分の事は出来るだけ書かない方針であつたのは、價値なき自分を人前に曝らしたとて何の益があるかを疑つたからである。元來私の書く文の拙劣、思想の低卑を思つて、よくも厚顔しく雜誌など出す氣になつたと自分で自分を嘲ける事が度々ある。それにも拘はらず、私はキリストを仰ぎ見て、其の愛に由つて動もすれば愛隣に陥らんとする心に大なる喜びを感じる。此の喜びとその源なるキリストだけは萬人に傳へて少しも恥ぢず、自分の生涯がそのため使用されて少しも悔ひない。之が雜誌を出す動機である。

内村鑑三全集

豫約募集

体裁
内容

四六版、四十五字詰十八行、各卷大凡七百五十頁

第一卷	初期の著作	上	第二卷	初期の著作	下
第三卷	舊約研究	上	第四卷	舊約研究	下
第五卷	新約研究	上	第六卷	新約研究	中
第七卷	新約研究	下	第八卷	教義研究	上
第九卷	教義研究	下	第十卷	講義	上
第十一卷	講演	下	第十二卷	所感	上
第十三卷	感想	下	第十四卷	時評	上
第十五卷	英文(之に準すべきもの)	上	第十六卷	英文	下
第十七卷	日記	上	第十八卷	日記	下
第十九卷	雜篇	上	第二十卷	書翰	下

支拂方法

(内容見本希望の方は發行所、東京市神田區一ツ橋、岩波書店に申込みましたし)
中 込 金 壹圓 に變更 (但最終會費に充つ)
毎月拂一冊分 貳圓 (第一回は申込金共參圓)
一時拂廿冊分參拾八圓 (申込金不要)

書留送料 毎月拂地方二十一錢 一時拂地方四圓二十錢

(臺灣、朝鮮、關東廳、樺太は一冊四十九錢)

發行期日

三月末 第一回配本、以下毎月一回
塚本虎二、畔上賢造、齋藤宗次郎、三谷隆正、鈴木俊郎

編輯委員

聖書の眞理誌讀者の大多數は未だ内村先生の著書を読まれない方と思ひます。此の際は非豫約を御勧めします。多分本誌を読まれるより其の方が益があると思ひます。

聖書の眞理社に申込まるゝ方には本社は出来るだけの便宜を計ります。

(昭和三年二月十六日
角三種郵便物認可)

聖書之眞理 第五十四號

昭和七年四月一日發行
(毎月一回發行)

聖書の眞理定價 (送料共)

一 部	二十 錢
半年(六部)	一圓十錢
一年(十二部)	二圓十錢
海外一年	二圓六十錢

拂込は聖書の眞理社 (振替東京六三三七五番) へ。獨立堂にてもよし。

昭和六年度合本

二圓五十錢

江原 萬里 著

聖書の現代經濟觀

一圓二十八錢

(以上總クロス製造料共)

昭和七年三月廿六日 印刷納本
昭和七年四月一日 發行

神奈川縣鎌倉町扇ヶ谷三三四三
編輯印刷 江原 萬里
兼發行人

發行所 聖書の眞理社
東京市外澁谷町向山九七

印刷所 共榮堂印刷所
東京市神田區表袋樂町一九

發賣所 獨立堂書房
東京市外澁橋町柏木九四六
振替東京一六四六番

本誌定價二十錢